

令和 7 事業年度 事業報告書

(自 令和 7 年 4 月 1 日 至 令和 8 年 3 月 31 日)

公益財団法人 ヤオコー子ども支援財団

【事業報告】

1. 事業の経過及びその成果

当財団は、埼玉県内にある子ども食堂・フードパントリーの利用者へのお米等の寄付を通じて、地域の食文化の発展と向上に寄与し、地域社会の健全な発展を目的として事業を展開した。また、子どもたちに体験の機会を提供し、豊かな人間性、自ら学び・考える等、生きる力の基盤や成長の糧となる支援を行った。

当事業年度における具体的な事業の経過および成果は以下の通りである。

(1) 子ども食堂、フードパントリーへの米・食品および衛生用品等の寄付実績（食・衛生支援）

埼玉県内にある 7 カ所のフードパントリー拠点を対象に、巡回形式によるお米および各種食品の寄付を実施した。なお、登録世帯数の多いエリアに位置する 5 カ所の拠点に対しては年 2 回の寄付（計 12 回の巡回支援）を行い、物価高騰に直面する地域困窮家庭の食生活を重点的かつ安定的に支えた。

また、株式会社ヤオコーの企業備蓄品入れ替えに伴う寄付（飲料水、マジックライス等）の受け入れや、メーカー各社との協働による「ヤオコー×メーカーコラボ寄付」を展開し、お米の定期支援に合わせて多種多様な食品を同時に届けた。なお、一部メーカーから提供された賞味期限間近の食品については、速やかな分配が可能なフードパントリーに限定して配布を行うなど、安全管理とフードロス削減を両立させた的確な運用を徹底した。

さらに、子ども食堂等の安心・安全な運営と衛生管理の向上を目的として、埼玉県子ども食堂ネットワークとも連携した衛生面の支援を実施した。株式会社ヤオコーの食品安全部門がボランティアとして飯能市および秩父市にて主催した「運営者向け衛生講習会（計 2 回・計 13 団体 26 名参加）」と連携し、財団からは現場での食中毒防止に不可欠な消耗品としてゴム手袋（M サイズ）の寄付を行い、講習会参加者を中心に配布することで、地域における安全な活動基盤づくりを後方支援した。

- **支援対象団体数：** 埼玉県内 406 団体（ネットワーク総数）
- **年間巡回回数：** 延べ 12 回（7 カ所巡回、うち 5 カ所は 2 回実施）
- **お米寄付総量：** 計 12,000 kg（12 トン）
- **メーカーコラボ・備蓄品等寄付実績：** 総額 1,220 万円相当
- **主な寄付物品：** 飲料水、マジックライス、スープ類、レトルトカレー、乳酸菌飲料、くだものゼリー、麦茶、お菓子類、スパゲッティ等
- **衛生用品寄付実績：** ゴム手袋（M サイズ）の寄付・配布（※株式会社ヤオコー主催の飯能・秩父での衛生講習会と連携、計 13 団体 26 名へ配布）

- **受益対象世帯数**：延べ約 47,850 世帯（※各団体平均 75 世帯として算出）
- **受益者数（対象利用者数）**：延べ約 143,550 名（※1 世帯あたり 3 名として算出）

（２）体験支援事業の実施（体験の機会の提供）

子どもたちの豊かな人間性、自ら学び・考える力など、生きる力の基盤や成長の糧となる機会を提供するため、環境・自然・食育、および社会インフラをテーマとした体験支援事業を定期的に実施した。

① 9 月：三富今昔村での環境教育・自然体験およびワークショップ

石坂産業株式会社の協力を得て、資源循環の重要性を学ぶリサイクル工場見学を実施した。廃棄物が細かく分別される工程を直に観察し、環境問題への理解を深めた。また、JHEP 認証で最高ランク（AAA）評価を受ける東京ドーム 4.5 個分の広大な里山「くぬぎの森」を探索し、キツツキの巣穴やしいたけの原木、竹林等の観察を通じて、生物多様性や人の手による里山再生について学んだ。

食育体験として、石坂ファームで収穫された野菜や埼玉県産の豚肉を用いたバーベキュー調理・食事を行い、地域の食の恵みを体感した。さらに、はちみつ石鹸づくりのワークショップでは、原材料の説明を受けた後に自由な成形を楽しみ、子どもたちの創造性を発揮

する機会を創出した。最後は「くぬぎの森環境塾」にて活発な質疑応答が行われ、環境問題や資源循環に対する子どもたちの主体的な学びの姿勢が見られた。

。 **参加人数**： 親子 39 名

② 11月：ヤオコーファーム野菜収穫体験および食育プログラム

アサヒロジスティクス株式会社の小型バス 2 台による安全な送迎協力を得て、熊谷市にあるヤオコーファーム圃場にて収穫体験を実施した。普段土に触れる機会の少ない子どもたちが、ファームスタッフの指導のもとで「宝探し」のように夢中になって、かぶ、大根、じゃがいもを収穫した。

昼食時には、ヤオコーSPA 推進部および熊谷デリカ・生鮮センターの協力のもと、収穫したばかりの野菜を使った「かぶのスープ」「大根のおでん」「じゃがいものポテトフライ」「大根の葉のおにぎり」などを全員で実食した。あわせてレシピ説明や野菜クイズを実施し、食育の観点からも深い学びを提供した。運営面では、低年齢の参加者に配慮したキッズスペースの設置や、ヤオコー公式キャラクター「ヤッポー」による歓送迎など、親子が安心して楽しめる環境づくりを徹底した。最後はエコバッグに収穫した野菜を詰めて土産とし、保護者からは「普段野菜を食べない子どもが喜んで食べた」などの高い満足度の声が寄せられた。

。 **参加人数**： 親子 36 名

③ 3月：物流センター探検事業（キャリア教育・社会インフラの理解）

子どもたちの社会への興味関心を育み、日常生活を支える流通の仕組みを学ぶため、アサヒロジスティクス株式会社および国分関信越株式会社の全面的な協力のもと、熊谷市内にある物流センターでの体験型見学プログラムを実施した。移動の際はアサヒロジスティクス株式会社の小型バス2台による安全な送迎を行った。

プログラムは子どもたちが飽きずに学べるよう「クイズ」や「宝探し」の形式を取り入れ、入荷・出荷バースの見学のほか、10トントラックやフォークリフトの運転席への乗車体験、実際の物流現場を体感できる「冷蔵庫・冷凍庫体験」を実施した。昼食時にはヤオコー籠原店のお弁当（3種類）を提供し、午後からは実際の業務に近い形での「仕分け作業体験」や「ピッキング体験」に挑戦した。各探検（見学・体験エリア）をクリアするごとにシールを獲得できるラリー形式とし、すべてのミッションを達成した子どもたちには最後に「物流探検認定証」を授与した。お土産として、実際に物流センターを通過したお菓子が手渡された。

流通の裏側を五感で体験したことで、社会インフラへの理解や日常生活と社会とのつながりを実感する貴重な機会となり、協調性や主体性の育成、さらには将来への視野を広げる豊かなキャリア教育へとつながった。

- 。参加人数：親子 29 名

【体験支援事業全体の成果】

自然・環境、食育、そして社会インフラ（物流）という多角的なテーマによる直接体験を通じて、子どもたちの環境意識の向上、健全な食習慣の促進、および主体的な学習意欲を多面的に喚起した。また、様々な民間企業・専門組織との高度な連携による質の高いプログラム提供により、親子の共同体験を通じた家族間の絆の深化と、地域社会における次世代育成に大きく貢献した。

- **年間実施回数**：計 3 回
- **受益者数（参加人数）**：延べ 104 名（※3 回分の参加者総数）

（3）広報・啓発活動による支援の見える化（社会への啓発と情報発信）

当財団の活動および協力企業・利用者の声を広く社会へ発信し、子ども食堂・フードパントリー事業への理解と参画を促すため、「支援の見える化」を目的とした情報発信活動を推進した。

具体的には、支援の状況や協力企業からの想い、利用者から寄せられた感謝の声をまとめた「ツリーボード」を作成し、株式会社ヤオコーのサポートセンターエントランスに常設掲示をした。来社されたお取引先様やお客様、また採用面接等で訪れた学生など、幅広い来訪者に対して活動の様子をダイレクトに伝えることで、民間主導による困窮家庭支援および次世代育成の重要性を広く社内外へ啓発した。

- **実施内容**： 活動実績・利用者の声を反映した「ツリーボード」の作成及び常設掲仕
- **掲示場所**： 株式会社ヤオコー サポートセンターエントランス
- **啓発対象**： 来社されたお客様、お取引先企業、求職活動中の学生、グループ社員等

2. 収益事業等の概要

当事業年度において、収益事業、法人共通事業等は実施していない。

令和7事業年度 事業報告の附属明細書

本事業年度（自 令和7年4月1日 至 令和8年3月31日）の事業報告については、

「一般社団法人及び一般財団法人に関する法律施行規則」第34条第3項に規定する附属明細書「事業報告の内容を補足する重要な事項」及び「役員の兼職状況の重要な変更」に該当する事実が存在しないため、その記載を省略する。

令和8年6月18日

公益財団法人 ヤオコー子ども支援財団